

■つなぐ つながる

空き地シェア 地域の庭に

公園の芝、住民が手入れ

地域コミュニティが希薄になったと言われて久しい。そんな時代に、空き地など「低未利用地」が増えている厳しい現実を逆手に取り、人と人をつなぐ拠点に造り替える動きが広がっている。地域に開かれた新しい「コモン（共同利用地）」の現場を訪ねた。

茨城県つくば市の竹園西広場公園に1月中旬、10人余りの住民が集まり、「つくばイクシバ！」の今年の活動を始めた。芝生の育成を通して地域づくりをするボランティア団体だ。

雑草取りなど芝生の手入れが終わると、参加者は羽子板やベーゴマ遊びに興じた。家族で参加した近所の女性(38)は「無心になれる雑草取りはストレス発散になるし、一人っ子の娘の遊び相手も見つかるので親として助かる」と話す。

公園は市有地。不動産開発のフリージャーナリストコーポレーション（東京）が、隣にマンションを開発するのに合わせ、2019年に産官学連携でリニューアルした。本来、公園は開発エリアではなかったが、緑豊かな街並みとの調和を求めている市に一体整備を持ち掛け、覚書を交わした。

元の公園は砂利で水はけが悪く、中心市街地で最も利用者が少ないと言われていた。うっそうとして暗いイメージを与えた樹木を剪定し、マンション敷地内に人気のカフェを誘致。境界

に柵は設けず、地域に開かれた公園を目指した。

20年には地域住民を巻き込み「つくばイクシバ！」を発足させた。芝生の手入れは東京の黎明橋公園で主婦らが13年に始めた「育てる芝生イクシバ！プロジェクト」をモデルにした。

同社事業開発課の大東絵理子さん(30)は「コモンとして地域に愛され続ける公園を考えたい」と話す。「公園は自分たちのもの」という意識の芽生えも期待したいという。「管理を行政任せにしなければ、きっと利用マナーも向上する」

「つくばイクシバ！」には地元不動産会社やカフェの運営会社もメンバーに引き入れた。公園利用者に無料で貸すゴザは、カフェの従業員が管理する。

筑波研究学園都市の開発経緯に詳しい筑波大の藤井さやか准教授（都市計画）



竹園西広場公園で芝生の手入れをする「つくばイクシバ！」の参加者たち
＝茨城県つくば市竹園1丁目



西圓寺の本堂ではデイサービス利用の高齢者や障害者らが体操をしていた＝石川県小松市

は「公共空間の整備に民間業者から関わり、周辺住民も巻き込んだ新しい動きだ」と評価する。

使う人がいなかったり、利用頻度が低かったりする「低未利用地」を「地域の庭」にする動きは、千葉県柏市にもある。市が10年に始めた「カシニワ制度」だ。管理が行き届かない土地の所有者と利用希望者を市が取り持つ。財政的に公園を整備する余力のない行政に代わり、市民が緑化を進める取り組みでもある。

廃寺にカフェ・温泉

白山連峰を望む石川県小松市では、廃寺が地域住民をつなぐ拠点に生まれ変わった。社会福祉法人の佛子園が運営する「三草二木西圓寺」だ。

元は真宗大谷派の寺院で、住職が亡くなり更地になる可能性もあった。門徒から相談を受けた佛子園が土地と建物を譲り受け、08年に高齢者や障害者の通所施設として開所した。本尊は運び出され、寺院ではなくなったが名前は残した。本堂の造りはそのままにカフェ兼居酒屋を開業し、温泉も掘削。温泉は公衆浴場とし、地域の約70世帯には無料開放している。自宅の風呂代わりにする人も多く、独居者の安否確認にも役立っている。

カフェの給仕やみそ造りなど仕事の一部を障害者ら施設利用者が担うので、地域住民と自然に交わる。1月に始まった今季のみそ造りでは、大きなたるを住民や職員ら6人が囲んだ。「何歳や?」。みその仕込み中、年齢を聞かれた知的障害のある成人男性が「12歳」と答えると、「じゃあ私も14歳と言わな」と住民が冗談で応じた。

施設長の秋山翔太さん(37)は「住民には利用者を含み込んでくれる優しさがある」と目を細める。近くに住む女性(73)も「施設が出来たお陰でみんなと顔を合わせて話したり、お風呂に入ったりできて楽しい」と話す。

空間シェアについて実践研究している東大の岡部明子教授（建築まちづくり）は「廃寺や空き地は共通の困り事なので、地域住民が無関心ではいられず、そこを拠点に相互扶助が機能しやすい」と指摘する。「人口減少で空き家などが増えている今こそ、住民が地域の空き空間を豊かにシェアするチャンスではないか」（平畑玄洋）

「意見や情報をお寄せください。ファックスは03・55695500、メールはtaruku-japan@asahi.com」